



貧しい人々の幸い

心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。

(マタイによる福音書5章3節)

イエス様のメッセージは、これを直接聞いた人々にとって、全く予想もつかないものでありました。祝福など縁遠いことと想像していたら、人たちがいきなり祝福されたからです。みんな、大変に驚いたことでしょう。

イエス様は貧しさの祝福を語ります。しかし私たちは思います。貧しいことが何で幸いなのかと。しかもマタイ福音書で「心の貧しい人々は、幸いである」となるところがルカ福音書6章20節では「心の」が取れて「貧しい人々は、幸いである」になっているのです。ただ一つのイエス様の言葉がなぜ二通りの仕方で記録されています。ただ「貧しい人々は、幸いである」も、「心の貧しい人々は、幸いである」も、両方とも深い意味があるのです。

イエス様が貧しい人々であれ、心の貧しい人々であれ、その人たちが幸いであると言われたことは人間の常識とはかけ離れています。誰だって、貧しいより豊かであることを願っているのです。しかし、神様が示して下さるビジョンは違います。「心」がついてない「貧しい人々」の方を考えてゆきますと、イエス様は「金持ちが天の国に入るのは難しい」と教えられており、このような意味において貧しい人々は幸いなのです。貧乏はその人が天国に入ることを妨げることはあまりありません。もっとも物質的に貧しければそれで良いというのでもなく、ここに「心の貧しさ」を問う必要が出てきます。

さて、ここまで来て恐縮ですが、「心の貧しい」という訳が本当に正しいかどうか検討する必要があります。聖書から離れて、私たちがふつう「心の貧しさ」ということでイメージするのは、心が狭い人といったことになってしまいうでしょう。「心が貧しい」と言われて喜ぶ人はいません。

実は、ここで「心」と訳されている言葉を

2021年8月発行

原文にあたってみると「霊」になります。そのため、ここを「霊の中で貧しい人たちは幸いである」と訳している聖書もあって、私はそちらの訳の方が良いと考えています。

心のもっとも深いところ、人が神様と触れ合うところ、そこが霊です。だから霊の中で貧しい人とは、「神様の前で、心の奥底から貧しさの中に生きる人」のことです。自分には何もない、無一文です、ではどうすれば豊かになるのか、自分には何もないので神様から頂くのです。のどがからからになった人が必死に水を求めるように、神様の恵みを必死に乞い求める人のことなのです。

謙遜な心も美しい心でありましょうが、それがここで語られているとは言えません。それ以上のことです。本当の意味における欠乏です。自分には何もない、神様にすがらなくては生きていけない、そういう人こそ幸いである、とイエス様は教えて下さったのです。

神様は謙遜な人を喜ばれます。しかし自分には謙遜という徳があるから神様に受け入れられるなんて思ったが最後、神様は遠ざかってゆくでしょう。霊の中で貧しいとは、一人一人が口に出さなくても心の中で誇りに思っているものをすべて取り去ったときに見えてくるものです。むろん、これはほかの人の前で、自分はどうしようもない人間だと卑屈になることではありません。ここで問題になっているのは、神様の前での心のありようです。霊の中で貧しい人ほど、神様のあわれみによって心が満たさなければ自分は永久にひからびた人間のままであるということがわかっているから、これを乞い求めるのです。

私は信じています。誰かが真実な思いで神様を愛し、また、ただ一人でも良い、悩んでいる人のかたわらに立つことが出来たなら、それは自分自身の持つ豊かさの故ではなく、すべてを与えるために天から降りて来られたイエス・キリストの豊かさにあずかることが出来たためです。神様は私たちの欠けた所をもって、私たちと結びついて下さいます。

(2021年6月13日オンライン礼拝説教より)

牧師 井上 豊